

魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

7 森の暮らし

狩りを終え、二人は小屋の前に戻ってきました。肩に背負^{しよっ}つたキジを扉の前にどすんと下ろし、ニーダマが朗らかに言います。

「さ、今日は美味しいキジ料理をたっぷり味わいましょう！ きみの腕を存分にふるつてくれよ」

「ね、ニーダマ。まだあなたの役割は終わっていないくてよ。料理の前に、羽をむしって捌くのを手伝っていただかなくてはね」

「ええ？」

ニーダマはびっくりしてしまいました。でも、ローズンに結婚をためらわせないためとはいえ、自分は猟師だと言ってしまったのです。まさか、羽をむしるのが怖いなんて言うわけにはいきません。ニーダマは決心をして唇をぎゅつと結び、キジの羽をむしり始めました。

「うふふ、ずいぶん下手なのね！」

ローズンが嬉しそうに笑いながらニーダマを手伝います。ニーダマは真剣そのもので、ローズンの手つきを真似ながら羽をむしりました。

「済まないね、ローズン。都では、猟師は狩りをしたらそれで終わりなんだよ。羽をむしったり、料理をするのはまた別の人の役目なんだ。だから、あまり慣れていなくて……」

まあ、上手なうそを思いついたものですね。ローズンはそんなニーダマの気持ちを知ってか知らぬか、ころころと楽しく笑いながら、ニーダマの不器用な手つきを直してくれました。

むしった羽の始末を手際よくしながらローズンが言います。

「わたしはね、思うの」

「なんだい？」

「生きものはね、みんな友達。子供のころから、わたしはずっとそう思っ

つたの」

「うん」

「でもね、わたしたちは森の動物たちや、湖の魚たちを食べなくては生きていけない。友達を食べるなんて、とんでもないことじゃないかって、ほんとうに悲しい思いをしていたの……」

「うん。でもそれは、しかたのないことじゃないか」

「そうよ。大人になって、わたしにはわかったの。人間も、いつかは死

ぬ……。その時にはわたしたちの体も、誰か、森の友達の食べ物になるのね」

「森の友達の、食べ物に？」

「ええ。きのこや花だって、このベリーだって、生きているのよ。動物が死ねば、最後はみな土に還るの。そしてその土を食べて、きのこや草花は生きていくの」

「土を、食べてるだって？ きみはおかしなことを言うんだなあ」

思わず笑いそうになるニーダマに、真剣な顔でローズンが続けます。

「わたしにはね、はつきりとわかるの。ずっと森に住んでいるから、森の生き物たちは全て、大きな大きな輪っかを作って、互いに生かされているのよ」

そう言うと、ローズンはニーダマの手をぎゅつと握りました。

「さあ、料理も一緒に作りましょう！」

ローズンが薔薇色の頬で言いました。

「ああ……、それはいいぞ！」

ローズンの言うことが全てわかったわけではありませんでしたが、ニーダマはとても感動していました。これまで周りにいたどんな女性ともまるつきりちがうローズンに、ニーダマは心から強く魅かれ、深く愛するようになっていました。

ローズンに導かれ、これまで入ったことのない奥の間へとニーダマは招かれました。そこは、思ったとおりのこじんまりした調理場で、左手にはローズンの寝室に繋がる小さな扉があるようでした。

ニーダマにとっては生まれて初めて経験することばかりで、楽しくて楽しくてしかたがありません。だって、今までは何もかも家来たちに任せっきりだったのですもの。お遊びの狩りで持ち帰った獲物が、どうやって美味しい料理になってテーブルに並ぶのかなんて、ただの一度だって興味を持ったこともありませんでした。

でも今、ニーダマは知ったのです。森や大地の大きな輪っかの一部として生きる事が、どんなに素晴らしいことか、って。

ニーダマは田舎の猟師の暮らしがすっかり気に入ってしまったようです。ほんとうに楽しくて、もう、王子に戻らなくてもいいや、って時々思ってしまうほどでした。

〈つづく〉